収蔵資料
調査報告書
9

上林春松家文書2

2007. 3
宇治市歴史資料館

収蔵資料
調査報告書
9
上林春松家文書２

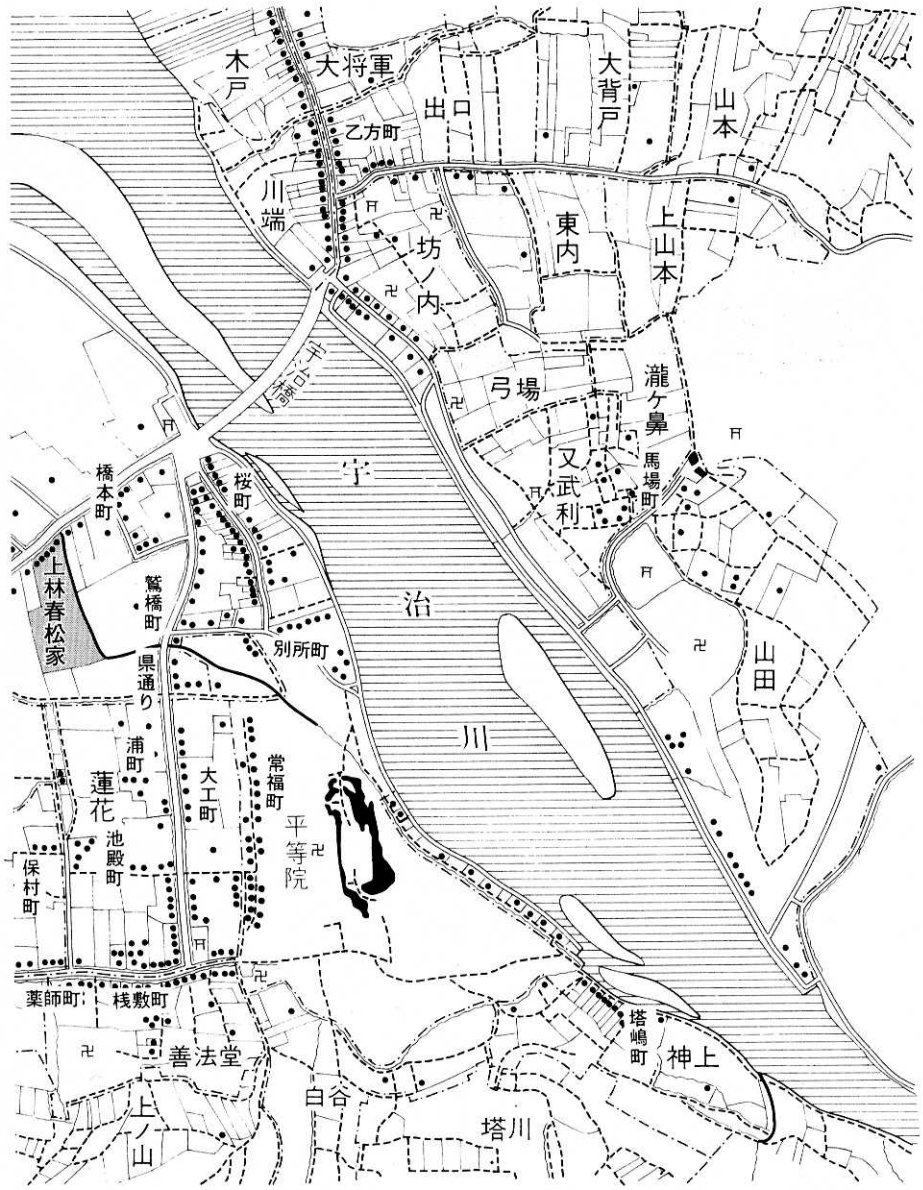
宇治市歴史資料館では、昭和59年(1984)の開館以来、関係資料の収集に努めて参りました。当初は閑散としていた収蔵庫も、今では多種多量の資料で一杯です。

「収蔵文書調査報告書」として平成９年度から刊行を開始した本シリーズは、昨年からより幅広い資料を紹介するため「収蔵資料調査報告書」と改めました。今回は、三年ぶりに上林春松家の古文書をとりあげます。

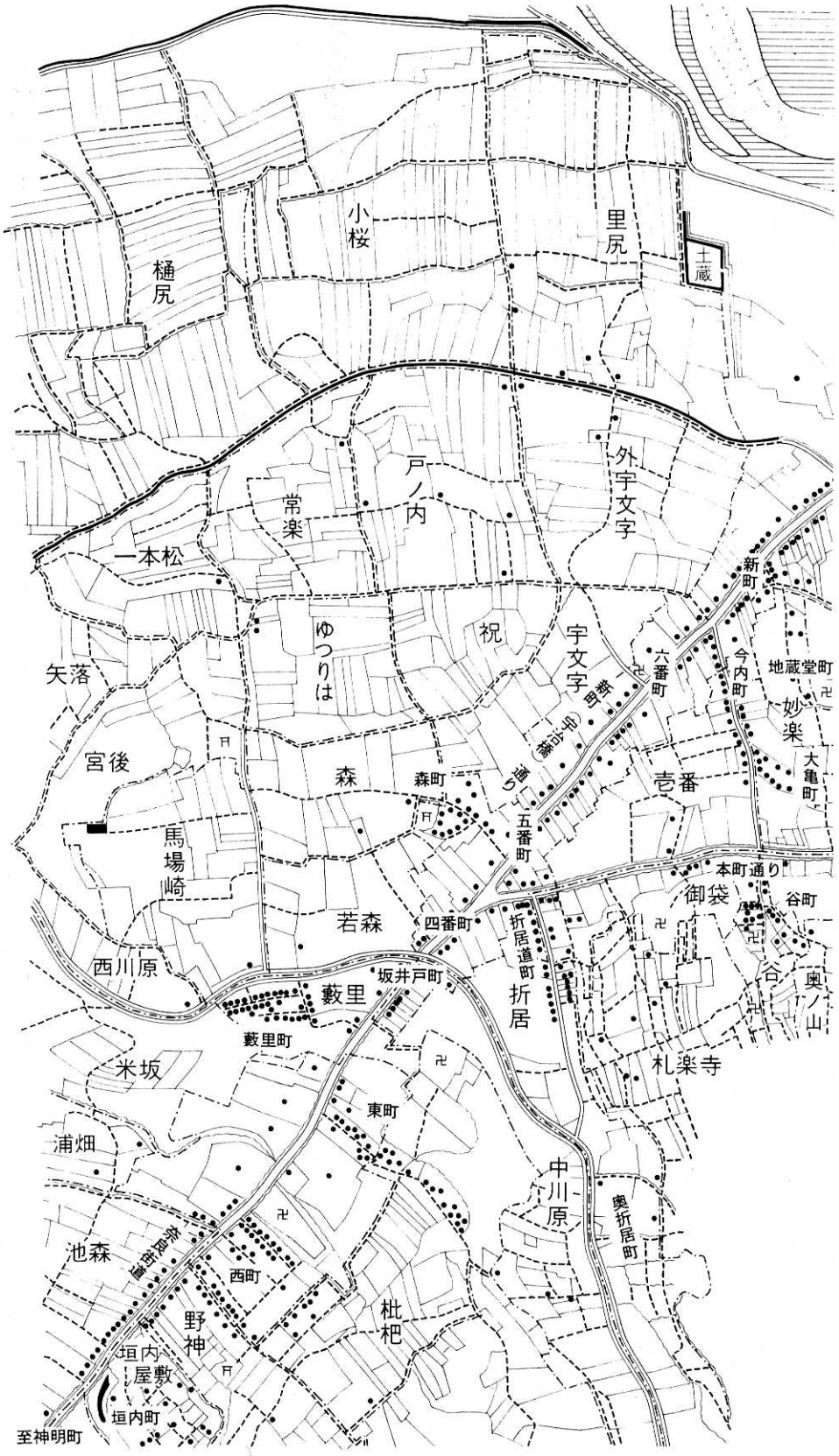
今後も当館の資料収集事業に対しまして、より一層のご協力をたまわりますよう、お願い申し上げます。

平成19年３月

宇治市歴史資料館



近世なかばの宇治郷（「宇治郷総絵図」より）


樋尻
小桜
里尻
土蔵
戸ノ内
常楽
外宇文字
一本松
新町
ゆつりは
祝
宇文字
六番町
今内町
地蔵堂町
矢落
妙楽
大亀町
宮後
森
森町
壱番
五番町
馬場崎
本町通り
御袋
谷町
若森
四番町
折居道町
西川原
坂井戸町
藪里
折居
奥ノ山
谷
藪里町
札楽寺
米坂
東町
浦畑
中川原
奥折居町
池森
西町
枇杷
野神
垣内屋敷
垣内町
至神明町

目次

宇治郷総絵図と七名園・七名水の伝承
—解題にかえて—……5
大名蜂須賀家と御用茶師上林春松家について　根津寿夫……7
史料翻刻
○四一　阿州茶料諸事控　寛政四年（一七九二）
○九八　阿州公様御入記録　文化十二年（一八一四）
尾張藩数奇屋頭の食の好みと茶会　坪内淳仁……27
史料翻刻
五八六　御献立
五八七　茶湯会付留
六〇一　御料理御献立
六〇二（献立）
七三六（茶会記）
上林春松家文書目録2……47

■宇治茶師関係文献案内

『宇治市史　二　中世の歴史と景観』宇治市　昭和四九年（一九七四）
第四章第三節「茶業の発展と茶師」ほか
『宇治市史　三　近世の歴史と景観』宇治市　昭和五一年（一九七六）
第一章第五節「茶師仲ケ間と茶壺道中」ほか
『宇治市史　四　近代の歴史と景観』宇治市　昭和五三年（一九七八）
第二章第五節「茶業の近代化」ほか
『宇治市史　六　西部の生活と環境』宇治市　昭和四九年（一九七四）
「1　宇治郷」ほか
宇治文庫四『宇治茶の文化史』宇治市歴史資料館　平成五年（一九九三）
宇治文庫六『宇治をめぐる人びと』宇治市歴史資料館　平成七年（一九九五）
宇治文庫一〇『緑茶の時代—宇治・黄檗の近世史—』宇治市歴史資料館　平成一一年（一九九九）
『収蔵文書調査報告書3　上林三入家文書』宇治市歴史資料館　二〇〇〇年
『収蔵文書調査報告書6　上林春松家文書』宇治市歴史資料館　二〇〇四年

凡例

一、本書は、当館に収蔵する上林春松家文書の二冊目の調査報告書である。
一、今回は、阿波藩との関係を根津寿夫氏（徳島市立徳島城博物館）に、尾張藩との関係を坪内淳仁氏（愛知大学綜合研究所）に紹介いただいたほか、巻頭の解説を坂本博司、その他を小嶋正亮が担当した。史料整理は岡本京子が補佐した。

宇治郷総絵図と七名園・七名水の伝承
―解題にかえて―

坂本博司

すっかり都市化された宇治だが、宇治橋から上流を眺める景色は美しく、四季折々の風情を満喫することができる。そんな宇治の中心街を、まるで空から俯瞰したかのように描く大きな古絵図がある。前回『上林春松家文書』を取り上げた『収蔵文書調査報告書6』の巻頭にその中心部分を載せたが、畳の数にすると十二帖もの広さがあるこの作品は、江戸時代の中頃につくられ、宇治郷総絵図と呼びならわされてきた。本図の成立要因には、代官を務めた上林家の解任という出来事があるので、政治的、行政的な意味合いが強く含まれていると見るべきである。とはいえ、本図の特徴と魅力は、異様なまでの大きさと、色あざやかで、絵画作品といってもよいくらいに、うまく仕上がっているところにある。

前回に掲出した宇治橋そして新町通りの家並の部分について細かく見ると、あきらかに誇張して、実際よりも立派に描かれていることに気が付く。町並の雰囲気があまりに揃いすぎている。元禄の大火以後、没落して廃屋になってしまっているところも多かったはずなのだが、きっちりした表構えばかりが描かれる。罷免された上林代官にはもちろんのこと、宇治郷という地域社会にも天下の茶どころとしての自負があったはずだ。絵の中に、全盛期の繁栄振りと風格のある趣を盛り込もうとする意図があったと思われる。

＊

そんな宇治郷には、お茶にまつわる伝承として七名園と七名水が語り継がれた。今も名称を刻んだ石碑がいくつかのこる。名園は「森、祝（いわい）、宇文字（うもじ）、川下（かわしも）、奥の山、朝日、枇杷」の七か所で、最後の部分を「朝日につづく枇杷とこそ知れ」、あるいは「枇杷とこそ聞け」と、歌に詠むようにして紹介されてきた。

名園と名水はかつての宇治の市街地を取り巻くように配置された。宇治橋西詰やや下流、ほぼＪＲの線路に沿うように川下、祝、宇文字、森とつづく。宇文字がちょうど宇治駅のあたり。枇杷は、いま記念碑が宇治市役所玄関下の駐車場脇に置かれるが、伝えによれば新町通りから一の坂を登りきった西町の辺が本来の場所という。奥の山は平等院の裏山、朝日は対岸の朝日山麓付近があてられる。

名水には川東の宇治・宇治上両社の境内にある桐原水、宇治橋西詰付近の公文水、平等院境内には阿弥陀水と法華水の二か所、泉殿と高浄水は折居川伏流の湧出水で場所はユニチカの工場入口付近である。数ある井戸のなかからは、本町通りと新町通りが交差するところの百夜月（ももよづき）井が加えられ、合計七か所。桐原水だけが今も現役である。

名園の成立を室町時代のはじめにまでさかのぼらせる考え方があるが、残念ながら今のところ賛成しかねる。なぜなら中世茶園の遺構がまったく見当たらないのである。近年、宇文字園の範囲に含まれそうな場所で発掘調査が行われたが、茶園としての土地利用はさほど古くないことが確認された。好事家たちの誇張された話が先にあって、地元があとからそれに見合った場所を設定したとみるほう

が自然である。

名園・名水それぞれ七つのポイントは、宇治郷の市街地をゆったりと二重に取り巻いていることに気付く。宇治なら、どこに居ても、いいお茶と水に出会うことができる。先人は特定の場所を強調しながら、宇治全体が銘茶の郷であることを宣伝したかったのだろう。絵図上の家並の描写、そして名園・名水の伝承は、伝統と格式にこだわる宇治の土地柄をうかがわせてくれる。

＊

かつて宇治郷には主要な道をはさんで、およそ三十か町ほどの住民組織があり、そこには町年寄や五人組の町役が置かれ、またこれらとは別に名主や百姓代といった役職が設けられ郷全体の自治的なまとまりを形成した。上林家をはじめ多彩な顔ぶれの宇治茶師たちは、こうした行政的な仕組のなかには位置づけられない。宇治郷の主たる生業はもちろん茶業である。通常の人口は三千人前後だが、毎年茶作りの最盛期にはおそらくその何倍もの季節労働者が流入し、超過密都市のような賑わいを呈した。行政的な体制といい、極端な人の動きといい、ここがとりわけ特異な地域としてありつづけたその訳は、宇治茶の本場であったことはもとより、それが将軍家をはじめとする諸侯各家の「御用」に立脚したことに大きく規定されていたからにほかならないと考える。

そんな「御用」の実態についての研究が、ようやく著につき、それが次第に深まりをみせようとしている。前回春松家の歴代について整理した坪内氏にはまたここでも一部を担っていただいた。ちなみに、同氏は尾張藩社会研究会（研究者代表者：岸野俊彦）に所属し、宇治茶師に強い関心を寄せている。

また徳島城博物館の特別展『大名と旅』で宇治茶師を取り上げられた根津寿夫氏には、蜂須賀家と宇治茶師上林春松について論考を寄せていただいた。ここに今後の宇治茶師研究の基本的な参考文献の一つを掲載できたことが何よりもうれしい。

春松家の文書群については、あともう一冊の報告書で一応の完結とするつもりでいる。当初に予期したことではないが、結果的に本書はいわばその中間報告的な位置づけを得たことになる。第三冊に向けて、新たな参画者の到来を待ち望んでいる。

大名蜂須賀家と御用茶師上林春松家について

根津寿夫

はじめに

徳島藩蜂須賀家は阿波・淡路両国二五万七千石を領した外様大藩である。豊臣秀吉に仕え大名となった正勝・家政、関ヶ原の戦いや大坂の陣で軍功を収めた至鎮。この三代のうちに豊臣取立大名から親徳川大名に転換を遂げ、天正一三年（一五八五）以降、明治時代に至るまで、蜂須賀家は阿波・淡路を治めた。

蜂須賀家の城下町である徳島は、江戸後期から明治時代にかけては全国順位第十位前後の人口を誇る繁栄をみせ、江戸時代から茶事が盛んであった。古くは、千利休から茶の湯を学び、家政・至鎮の時代には眉山麓の瑞巌寺で茶事が催された。四代藩主綱通は京都の藪内流二世紹智の三男紹春を招き藩の茶頭にした（三代紹貞で途絶える）。十代藩主重喜が千家裏流を庇護したことから江戸後期には千家裏流が武士階級に定着し、さらに徳島城下の町人たちに浸透した（『徳島市史』第四巻）。

今日でも茶道は盛んであり、その歴史も解明されつつある。しかし、茶の文化を基底で支えた、茶の供給や御用茶師の存在形態は、徳島においては全くの未解明の分野である。筆者は、幸いにも平成一七年の特別展「大名の旅　―徳島藩参勤交代の社会史―」の準備のため上林春松家文書を調査し、当該問題について考える機会を得た。本稿は、はなはだ不充分ではあるが、当該問題解明の一助となれば幸いである。

さて、宇治橋通に面した上林記念館は、江戸時代、尾張徳川家や阿波蜂須賀家の御用茶師として活躍した上林春松家の長屋門を修復し利用している展示施設である。町並みのなかに一際目立つ長屋門の重々しい構えは宇治の歴史を漂わせているようであるが、この建物の屋根には左万字紋の付いた大きな瓦がみえる。元禄一一年（一六九八）の大火により焼失した同家の屋敷は徳島藩蜂須賀家の庇護を受けて再建されたという。屋根瓦はそれを裏付けている。さらに、当代春松氏によれば、茶室も蜂須賀家の寄進であり、井戸も「蜂須賀井」と呼んでいるという。蜂須賀家側からみた場合、上林春松家との関係は他に類がなく、強固である。しかも、今日においても、その歴史は脈々と受け継がれており、まことに興味深い。

そこで、本稿では徳島藩蜂須賀家と宇治の御用茶師上林春松家との歴史的な関係、その具体像を探ってみたい。

一「御出入」の由緒

まず数多く残る「由緒書」のなかから、関係の初めを探ってみたい。

文化六巳年二月右願書ニ付、由緒書認差出候

由緒書

福聚院様（正勝）摂（播）州龍野御在城之御時、私先祖丹州上林郡居住仕候、則上林加賀守入道宗印与申者ニ御座候、此時より　御懇ニ被為仰付、御館入被為仰付候、尤其節者未茶業者不仕候、（中略）右入道宗印、其後、天正年中従　秀吉公、宇治

三千石領地被下置、尤宇治者従古来茶所之儀御座候、其砌ニ者茶業之家茂絶之罷成、依之秀吉公御茶被為好候ニ付、御大名様方御茶事専ニ相成申候、然共茶業之家茂外ニ無御座候ニ付右宗印忰嫡子掃部と申候、二男九郎与申候、三男権兵衛与申候、右権兵衛剃髪仕、春松与改名仕候様秀吉公蒙　御意、両人共茶製仕候、此時宗印儀御懇之御由緒を以　福聚院様御茶元被為仰付候、則御茶為御支配米銀米弐百石被下置候、二男九郎儀者味卜相改、細川幽斎様江御館入御茶元被　仰付、右之通夫々御茶業之家ニ相成申候（No.〇六八「由緒書」）

両家の関係は、蜂須賀正勝と上林宗印といった互いの始祖にまで遡る。正勝が播磨国龍野城主だった時代に懇意となり宗印は蜂須賀家に出入りしていたという。その後、宗印が宇治で茶業を始めると、正勝の「御茶元」となり支配米として二百石が与えられた。

以上が当史料にみえる関係の初出である。他の由緒書もおおむね正勝からとしている。実際に正勝時代から関係があったかもしれないが、そのことを客観的に証明することは難しい。

しかし、正勝時代はともかくとして、上林春松家の蜂須賀家への出入りは江戸初期にまで遡ることは間違いがないだろう。これは、九月二二日付け「松千松書状　上林春松宛」（上林春松氏蔵）によってうかがえる。

以上

一書令申候、□
者亀山迄如出
殊御振舞喜
悦之至候、随而
銀子五枚令遣
入候間、此者口上ニ申候
恐々謹言
松仙叅
九月廿二日　忠（花押）
上林春松殿

贈答品に対する二代藩主忠英の礼状である。忠英は幼名「千松丸」を使用しており、本書状は元服する寛永四年（一六二七）以前のものである。忠英は元和六年（一六二〇）に父至鎮の急逝を受けて十才で家督を継いだため、この間の書状である。恐らく、上林春松家との関係は、至鎮や当時忠英を後見していた蓮庵（家政）時代からのものであったろう。

二　茶詰と販売

「御茶入日記」とは、御用茶師が大名家等の茶壺に詰めた茶の目録である。『上林春松家文書目録一』によれば、同日記は天和二年（一六八二）から元禄一六年（一七〇三）までの一七冊が確認される。五代藩主綱矩の日記とは別に、彼を後見した分家の冨田新田藩主隆重のものもみえる。

元禄四年（一六九一）の「淡路守様御茶入日記」（No.〇一一〇一）をみると、二三口の壺に九四キロもの茶が詰められている。膨大な量の茶であるが、他の日記をみても分量は大きくは変わらない。恒常的に大量の茶を発注していたことになる。果して、これだけの分

量の茶を実際に消費していたのか不明であるが、上林春松家側としては上得意であったろう。

なお、江戸中期における蜂須賀家の年中行事記録をみると、茶詰めの役目は上林春松が勤めることになっている（蜂須賀家文書「宗員様　年中御記録并江戸共　帳」国文学研究資料館蔵）。

江戸中期までは上林春松家では当主自身が、随時、徳島に訪れていたようである。その後は、店の者を派遣し注文を得るため恒常的に得意先を廻った。

寛政四年（一七九二）の「阿州茶料諸事控」（No.〇四一、11頁参照）によれば、先代藩主重喜の住む冨田屋敷や公族のいた花畠屋敷、中老岩田七左衛門屋敷等を訪れている。藩主の弟若狭喜翰のところには、煎茶二〇匁を贈答品として配っている。「右御屋鋪、当年秋切茶、今ニ申不参候間、何分此節御用被仰付被下候様呉々願可申候事」と記されており、注文のない屋敷には重点的に営業活動を行っていることが分かる。

先述の文化六年（一八〇九）の由緒書は、蜂須賀家との固有の関係を強調しながら、次のような願望を表している。

然ル所、峻徳院様（至鎮）様御代、阿淡御両国へ入込御茶類、春松切手無之候而者取捌御停止被為仰附、御両国江御茶持参仕候者は、私方ニ而相糺、宗旨印形相改、御国法申聞せ、別条無之者江は、私より御切手相願頂戴仕

当時は、郷茶師山上幸二が阿波に来国し手広く茶の販売を行っていた。こうした事情を踏まえて、阿波・淡路で茶類販売に入国する者の統制権（「私より御切手相願頂戴仕」）を確保しようとしている。この「由緒書」からは、宇治郷に隣接する大鳳寺村の山上ら新興茶師の進出を抑制し、徳島藩領における茶類の独占販売ないしは販売管理といった権益を保持しようとした上林春松家の動向がうかがえる。

江戸時代が終わり茶師制度が廃止され多くの茶師は廃業・没落した（『宇治市史3』）が、上林春松家は茶業を存続させた。その要因となったかは不明であるが、明治初年、徳島の人びとを対象に販売促進を図るために引札が作られ、その版木が現存する。これは言うまでもなく、藩主の嗜好や愛着といった個人的なレベルではなく、江戸時代における茶類販売に関する独占状況、さらには同家の茶を好んだ強固な顧客が存在していたことに他ならないだろう。上林春松家が引札を作り阿波に販売に訪れるほど、同家の茶を愛した人びとが存在したのである。

三　参勤交代

徳島藩の参勤経路は、徳島を出て大坂に入港した後、淀川を遡上し伏見に上陸し、木曽路から東海道を利用して江戸に入った。伏見では福井与左衛門本陣が定宿であり、同所で徳島藩出入りの町人等と対面するのが定例であった。上林春松も拝謁者の一人であり、支障がなければ伏見本陣に伺候し拝謁することになっていた。

徳島藩参勤交代の特徴の一つは、帰国時よりも江戸に向かう参勤時の方が日数を要したことである。帰国時が一五～一六日に対して、参勤時は一九～二〇日を要する。その理由は、「廻勤」と称して鷹司家や醍醐家といった縁戚の公家や京都所司代を表敬訪問すること、さらにこちらの方が主要かもしれないが、京都及びその周辺の

散策を頻繁に行っている。こうした伏見本陣に滞在しながら、京都やその周辺を巡見することは徳島藩参勤交代の恒例行事であった。

さて、十二代藩主斉昌は、文化一二年（一八一五）三月一六日に宇治の上林春松家を訪れている。当然のことながら、同家訪問は事前に計画されており、上林家ではあらかじめ藩の御膳番に斉昌の嗜好を聞き、豪華な食事を取り揃えている。斉昌の好物はすし類・作り身・鯛等の塩焼きで、饗応された食事では、鮎すしを気に入り三回もお替わりしている。食事のあと、濃茶（大祝昔）・薄茶（極昔）のほか煎茶（折鷹・喜撰）を楽しみ、「御膳御廻り　御意相叶候、御茶之処も能あかり申候、別而折たか殊の外御歓御意被下置候」と斉昌は満足している（No.〇九八「阿州公様御入記録」15頁参照）。

斉昌は約三〇年にわたり参勤交代の日記を自筆で綴っているが、同年の「参勤旅中日記」（個人蔵）をみると、「宇治橋ヲわたり上林春松方ニて昼休、吸もの・めし出る、塩梅よし、献立ハ雑記ニゆつる」と記されている。街道の名物料理を食べ、その感想を記すことを習慣とした斉昌にとって、上林家で饗応された食事は簡潔ではあるが好評価が与えられ、特に献立を別帳に記録しているほどだ。

なお、同家を訪問したのは斉昌だけではなく歴代藩主やさらには側室等も訪れている。このようにして蜂須賀家と上林春松家との関係は、顧客と茶師というだけでなく、人格的なつながりまでをも含む関係になっていったと考えられる。

四　阿波煎茶「祝山」

阿波国では各地で番茶が栽培され消費されていたが、幕末の時期には、上林春松の指導を仰いで煎茶の栽培を行っている。大正四年に神河庚蔵により編集・発行された『阿波国最近文明史料』を引用する。

製茶創業　蔵屋京蔵

京蔵は本市通町の人なり。名東郡下八万村に山を墾して茶を種て製茶を創せんとす。弘化・嘉永の頃、藩主斉裕これを好みし、祝山の号を賜ひ、宇治上林某に命して茶師を招く。大澤弥平なる者来て専ら指導に従事す。官これに禄を給す。古来、那賀郡山分木頭村自生の茶樹多く製する所の茶を番茶と称し、其産額は藩内大半の常用を支ふるも、煎茶とし賞玩すへきもの祝山の製茶を嚆矢とす。維新後、各地に製するもの祝山の製法に依ると云ふ。

一三代藩主斉裕は、蔵屋京蔵の製茶を支援し「祝山」の号を与え、上林家（春松家と推定）から指導者を派遣させて煎茶栽培を行った。これが、阿波国の煎茶栽培の始まりだとする。明治以降、この「祝山」の製法が各地に伝播した。

煎茶を日常的に飲む習慣が浸透したことを踏まえた上での事業であるが、ここにも上林家の名前が現れるのは蜂須賀家との歴史的な信頼関係があったからであろう。注目すべき事例である。

おわりに

大名蜂須賀家と御用茶師上林春松家との関係を具体的にみてきた。ほぼ江戸前期から明治時代に至るまで、大名と御用茶師としての関係は変わらず、歴史的なつながりと言えるだろう。その関係は、